2015 年夏

福島を感じて考えるスタディツアー

「スタ☆ふく」水産漁業ツアー2015

～あなたと漁師の絆旅～

活動報告書

2015 年 10 月

企画：スタ☆ふくプロジェクト

助成：住友商事　東日本再生ユースチャレンジ・プログラム―活動・研究助成―2015 年度

目次

0. 目次----------1
1. はじめに----------2
2. 企画背景----------3
3. 企画趣旨・目的----------4
4. 団体概要----------6
5. ツアー詳細----------8
① 概要----------8
② ツアー行程----------9
③ アンケート結果----------14
④ 参加者の声----------16
⑤ 企画担当者の声----------18
⑥ 今回のツアーの価値・評価----------19
6. 広報／メディア掲載について----------20
7. ご協力いただいたみなさま----------23
8. 総括----------25
9. 問い合わせ先----------26

1.　はじめに

2012 年 4 月から始まった弊団体の活動も 4 年目に突入しました。福島のリアルを感じてもらえるようなツアーをつくろうと、『スタ☆ふく』のツアー企画も今回で 13 回目を数えることとなります。「スタ☆ふくいわき水産漁業ツアー 2015 あなたと漁師の絆旅　～この夏“大漁の”出会いをいわきの海で～」と銘打った本ツアーは、2012 年からいわき市の水産漁業の現状を追うツアーとして毎年開催を続け、今回で 4 年連続の開催となります。過去 3 年間の弊団体といわきの漁業の歩みを振り返るとともに、今の私たちにできることを考え抜きながら企画にあたり、無事 4 度目のツアーを実施することができました。

これも本企画にご協力いただいている多くの皆さまのおかげであります。そのような方々への感謝の意を込めつつも、より多くの方々に私たちの活動、そして今の福島の現状を知っていただくべく、報告書を作成しました。

この報告書を通して、私たちの活動内容、福島の漁業の現状への理解を深めていただけたら幸いです。

―1 日目、漁師との交流プログラムでの集合写真　道の駅よつくら港にて―

2. 企画背景

「東日本大大震災後の福島の現状を見て体験することで、福島への関心を深めてほしい。」この想いを胸に、2012 年 4 月、福島大学の学生によって発足し、企画されたのが“福島を感じて考えるスタディツアー「スタ☆ふく」”でした。

これまで県内 7 か所で計 12 回、福島県内外から 283 名を動員するスタディツアーを企画してきました。地域の人との交流に重点を置いたプログラムを通して、福島のありのままの現状を伝えることや、その地特有の課題に向き合う人々の「生の声」を発信していくことで、風評被害の払拭や福島への関心の高度化などをはかり、震災からの復興や地域活性化の一助となるようなツアーの企画にあたっております。参加者ならびに地域関係者からは,「今後とも継続的にツアーを実施してほしい」という声を多くいただきます。

企画者自身の私たちが、一番に「福島」から学ぶこと、そして福島の「リアル」を発信し、ツアー参加者や地域の方々と共に「復興とは」ということや、福島や各地域の「未来」について今後も考え続け、地域と参加者をつなぐ架け橋となれるよう、今後も継続的に活動をしていきます。

今回で、いわき水産漁業ツアーは 4 度目の開催になります。過去 3 回の企画で合わせて 102 名の参加者の方にいわきへ足を運んでいただきました。地元漁師からは継続的な開催を望む声や、参加者からも「一生忘れられない思い出ができた。」「絶対にまた来たい」といったアンケートの意見があり高い満足度の評価をいただいております。私たち自身も継続的に関わりを持っていきたいという思いと、現地からも継続的な PR を望む声が聞かれ、今回第 4 弾として，この企画に至った背景となります。

3. 企画趣旨・目的

いわき市は福島県浜通り南部に位置し、東は太平洋に面した、昔から水産漁業が盛んな地域です。しかし、震災後、福島第一原発事故による放射能汚染問題により、震災後 3 年にわたって沿岸での漁の『自粛』を続けてきました。そこには「消費者に安全なものを届けたい」という漁師をはじめとする水産漁業に携わる地域の人々の想いとプライドがあり、漁師たちは 2011 年 4 月以降、週に 1 度のモニタリング漁を欠かさず行いながら、放射線のデータを取り続け、漁の再開に向けて話し合いを重ねてきました。そして、2013 年 10 月、「試験操業」という形で 3 年ぶりに小規模ながらも、消費者向けの漁が再開されたのです。

あっという間でもあり、とても長かった震災からの 4 年間。私たちの見えないところでいわきの漁業は日々揺れ動き、その中で自らの仕事にプライドと熱い情熱を持って過ごす漁師や水産漁業に関わる人々の姿があり、それぞれの想いがあります。震災から 5 年目を迎え、いわきの漁業は確実に一歩ずつ前へ進んではいますが、復興までまだまだ長い時間がかかることも事実です。実際に漁師や水産漁業に関わる人々との交流や体験活動を通して、足を運ばないと知ることのできない現地の人々の「想い」に触れるとともに、日々変わりゆく現状をより多くの人に伝え、いわきの漁業を身近なものに感じてもらうことが私たちにできる継続的な取り組みだと考え、今回の企画にあたりました。

―いわき水産漁業ツアー2015　企画メンバー―

【目的】
・いわきの漁業の復興の一助となる
→風評被害払拭へつなげる、地域関係者のモチベーション喚起、参加者自らの情報発信
・いわきの漁業の未来を支える人材の創出
→生産者と消費者の顔の見える関係づくりによるファンづくり

【目標】
＜定性目標＞
・実際に体験することでいわきの漁業の正しい状況を知る
・継続的にいわき・福島に関心を持って行動するきっかけをつくる
・生産者と消費者の顔が見える繋がりを創出し、両者に前向きな気持ちをもたらす

＜定量目標＞
・参加者 30 名以上獲得
・参加者満足度 90%以上

【コンセプト】
「漁師に寄り添い　いわきの漁業を身近なものに」
→1 泊 2 日の交流体験や漁師の生の声を聞くことで参加者がいわきの漁業に当事者意識を持ち、地域に寄り添い続けたいと思う意識の変化を生み出す。

―漁師との打ち合わせの様子―

4.団体概要

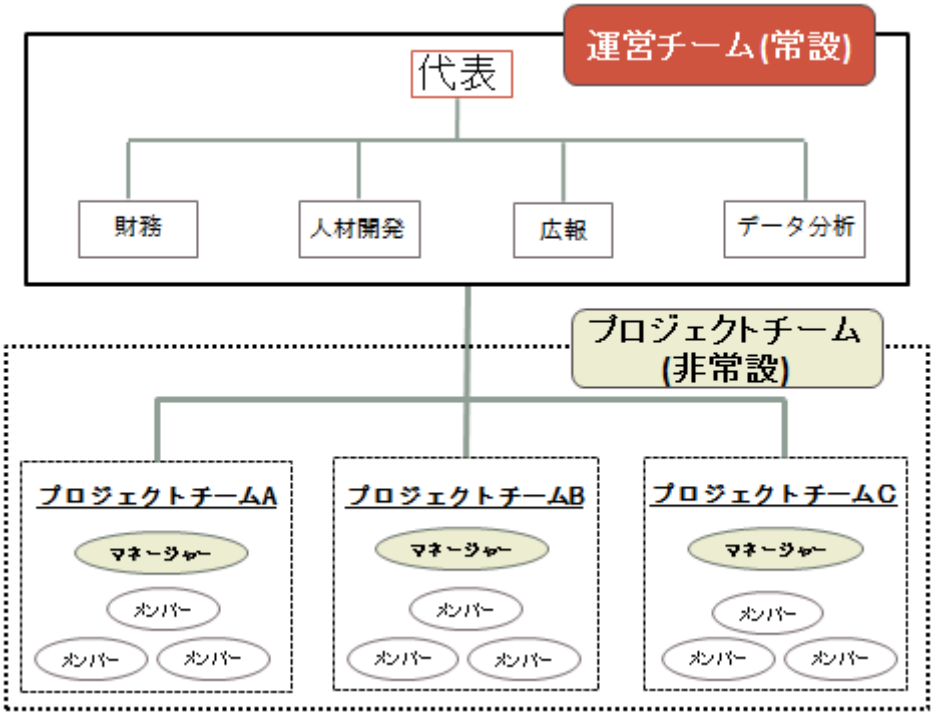
『スタ☆ふくプロジェクト』は 2013 年 4 月に母体団体であった『全国学生プロジェクト(JASP)』から分離独立しました。スタディツアー事業の活動開始は 2012 年 4 月であり、これまで福島県いわき市、二本松市、喜多方市でその土地の産業に焦点を当てた体験型のスタディツアーを 3 年にわたり実施してきました。

また、一昨年は県内の学生や高校生をターゲットに、「地元から学ぼう」をコンセプトに「ふくしま若者ツアー」といった日帰りツアーや、会津の日本酒振興策を学生が考える「若者が考える会津日本酒コンテスト」等の実施も行っています。全メンバーが福島大学の学生によって組織された組織で、2015 年 9 月 30 日現在 17 名で活動を展開しています。

【受賞歴】

2013 年 6 月　観光庁主催『若者旅行を応援する観光庁官賞「東北ブロック賞」』受賞

【組織図】



【構成メンバー（2015 年 9 月 31 日現在）】

～運営チーム～

代表	羽賀さやか	行政政策学類 3 年
人材開発	渡部直子	人間発達文化学類 3 年
広報	三浦菜生	行政政策学類 3 年
データ分析	阿部晴佳	行政政策学類 3 年
財務	田辺将大	共生システム理工学類 3 年

～活動メンバー～

黒澤和也	経済経営学類 3 年	遠藤はるひ	行政政策学類 4 年
平澤和弥	経済経営学類 2 年	國分花菜	経済経営学類 4 年
菊地実咲	人間発達文化学類 1 年	武藤茉奈美	人間発達文化学類 4 年
牧内美樹	経済経営学類 1 年	青木悠里	人間発達文化学類 4 年
宝槻亮汰	行政政策学類 1 年	安斉舞	行政政策学類 4 年
吉田江里	人間発達文化学類 4 年	吉田光希	経済経営学類 4 年

プロジェクト開始：2012 年 4 月　　団体発足：2013 年 4 月

【過去のスタディツアー】

2012 年 8 月	「スタ☆ふく水産漁業ツアー」	いわき市	(32 名動員)
2012 年 9 月	「スタ☆ふく観光ツアー」	喜多方市	(27 名動員)
2012 年 9 月	「スタ☆ふく農業ツアー」	二本松市	(25 名動員)
2012 年 12 月	「スタ☆ふく冬ツアー」	二本松市	(18 名動員)
2013 年 8 月	「スタ☆ふく水産漁業ツアー2013」	いわき市	(37 名動員)
2013 年 9 月	「スタ☆ふくまちづくりツアー」	二本松市	（33 名動員）
2013 年 11 月	「スタ☆ふく福島の子どもツアー」	郡山市	（15 名動員）
2013 年 11 月	「スタ☆ふく福島の食ツアー」	福島市	（12 名動員）
2014 年 8 月	「スタ☆ふく保原×霊山おたのしみイベント」	伊達市	（20 名動員）
2014 年 8 月	「スタ☆ふくいわき水産漁業ツアー」	いわき市	（32 名動員）
2015 年 2 月	「スタ☆ふく会津日本酒ツアー」	会津若松、坂下町	（19 名動員）
2015 年 2 月	「スタ☆ふく東和田舎暮らしツアー」	二本松市	（14 名動員）

【団体連絡先】

〒960-1296　福島県福島市金谷川 1　福島大学学生課　「スタ☆ふくプロジェクト」
Mail：suta.fuku@gmail.com

5. ツアー詳細

①ツアー概要

＜タイトル＞
「スタ☆ふく水産漁業ツアー2015　あなたと漁師の絆旅」

＜テーマ＞
「～この夏　“大漁”の出会いをいわきの海で～」

＜実施日＞
2015 年 8 月 22 日（土）～8 月 23 日（日）（1 泊 2 日）

＜実施場所＞
福島県いわき市

＜参加者動員数＞
計 40 名

＜参加スタッフ＞
田辺将大　（福島大 3 年）
羽賀さやか（福島大 3 年）
牧内美樹　（福島大 1 年）

渡部直子　（福島大 3 年）
三浦菜生　（福島大 3 年）
黒澤和也　（福島大 3 年）
平澤和弥　（福島大 2 年）

＜参加料金＞
一般料金：16,500 円
学生料金：13,500 円（先着 20 名）

②ツアー行程

1 日目　8 月 22 日（土）

時間	行程	参加者の様子
10:10	いわき駅集合・出発	参加者同士、初対面。少し緊張の面持ち。
10:50	放射性物質検査体制見学	小名浜魚市場の検査室にて、試験操業で水揚げされた魚の前処理から数値測定までの流れの説明を見学したり、今年新しくできた小名浜魚市場の施設見学を行ったりした。
12:10	昼食	福仙和風レストランにて昼食。座ったテーブルごとに自己紹介をするなどして交流を深めた。
12:50	行政による基調講演	福島県水産試験場の藤田さんに放射線の基礎知識やいわきの水産業の現状などについて講演していただいた。

14:05	対面式	四倉港にて漁師とご対面。各船の船長の紹介や、実際にどのような道具を用いて漁をしているのか見せていただきながら漁法の説明を聞いた。漁見学は悪天候のためできなかったが、実際に参加者を船に乗せて湾内 1 周をしていただいた。
	ロープワーク体験 ホッキ殻むき体験	船舶の諸作業で使用され、また実生活でも活かすことのできるロープの使い方やホッキの殻むきの方法についても漁師から直伝で教えていただいた。

	海鮮 BBQ	参加者・漁師・スタッフで約 70 人規模での BBQ。漁師が用意して下さった海鮮などを味わいながら漁師・参加者・スタッフ含め多くの人と交流する場となった。
19:20	宿泊先到着	宿泊先である古滝屋では、希望者で懇親会も開き、参加者・スタッフで交流を深めたり、1 日目の感想を述べたりした。

2 日目　8 月 23 日（日）

9:00	鰹節削り見学・講演	伝統ある鰹節屋である山一中田商店で、実際に鰹節を削っていただき削りたてのものを試食させてもらったり、そこにお湯を入れて出汁にして試飲したりした。講演としては鰹の調理での使用方法や震災を経ての中田さん自身の想いをお話していただいた。参加者は各々、鰹節などの購入もしていた。
11:05	講演・昼食・干物加工体験	ニイダヤ水産にて、津波で被災してからお店再開までのお話や、干物加工に対する想いを講演していただいた。また、その後は実際にイワシのさばき体験を参加者全員が経験した。「難しい」と口にしながらも楽しんでおり、完成した干物が届くのを楽しみにしていたようだった。お昼には、お店でつくった干物なども食べ、お土産購入も多くの人がしていた。
13:15	お土産購入	道の駅よつくら港にて、各自お土産の購入を楽しんだ。

13:45	まとめ振り返りのワークショップ	最初にツアー全体をスライドなども用いながら振り返り、漁師に漁の自粛中の想いや消費者に伝えたいことについてお話していただいた。 その後、グループに分かれて、ツアーを経て気づいたこと、他の参加者の意見を聞いて新たに気づいたことを参加者・漁師交えて意見の共有をした。
16:40	いわき駅解散	ツアーを経て、別れが名残惜しそうだった参加者。2 日間、お疲れ様でした。

③アンケート結果

○ツアー満足度全体平均

3.73 / 4.0　ポイント

	悪	～	～	良		
	1	2	3	4	計 (人)	平均
① ツアー全体	0	0	7	29	36	3.80
② ツアー料金	0	2	10	24	36	3.61
③ タイムスケジュール	0	2	14	20	36	3.50
④ お食事	0	2	10	24	36	3.61
⑤ 宿泊先	0	0	3	33	36	3.77
⑥ スタッフ対応	0	0	3	33	36	3.91
⑦ コンテンツ	0	1	6	29	36	3.91
全体						**3.73**

○ツアー参加者状況

学生：社会人　＝　５：４　(回答者母数 36)

県内：県外（出身地）　＝　５：７（回答者母数 33）

参加者年代

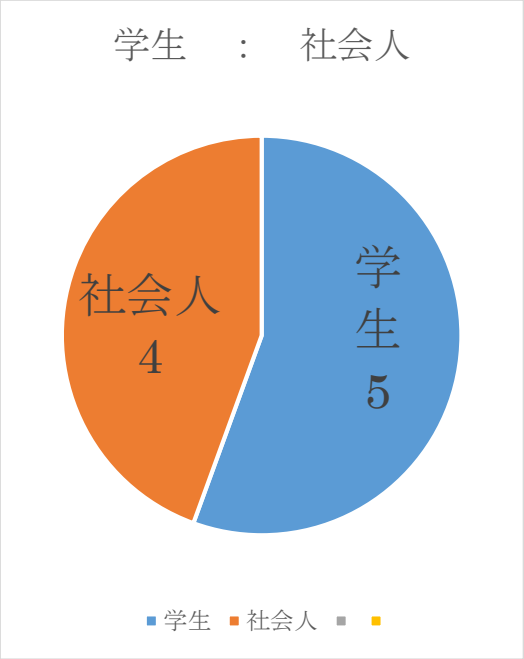
10 代…5 人

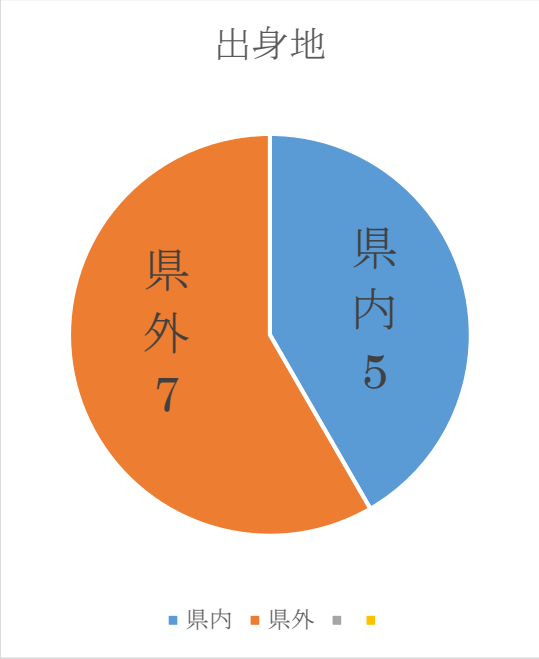
20 代…17 人

30 代…2 人

40 代…5 人

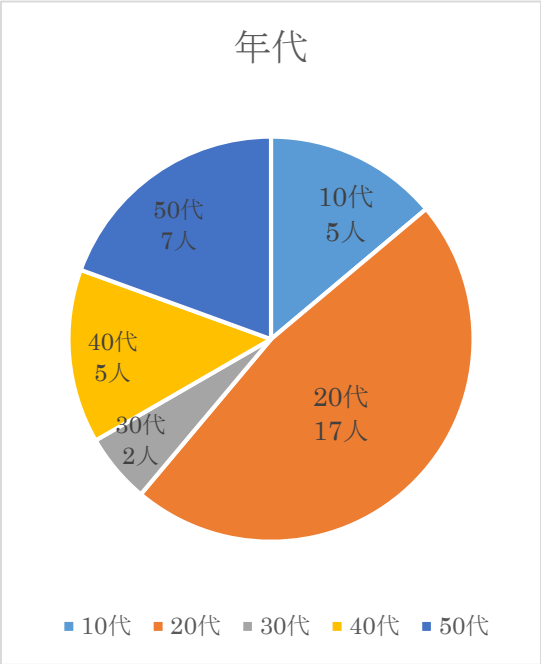
50 代…7 人　　（回答母数 36）





社会人と学生の比率は、若干学生の方が多いようでした。

県内出身者だけでなく、県外出身者も多く参加していただいています。



20 代の参加者が最も多く、次いで 50 代の参加者が多くなっています。
幅広い年代の方から参加いただいています。

④参加者の声（一部抜粋）

・来なければ分からないことがたくさんありました。いわきの「今」や漁師さんたちの強い思いを知り、自分がこれから何かをしなければいけないと気づかされました。（10 代女性）

・いわきの漁師と触れ合う機会はそれだけで貴重なものであり、今知りたい、いわきの水産業について知ることができた。広く全国から来てほしいツアーのように思う（20 代男性）

・今回初めての参加でしたが、とても充実して楽しいツアーでした。このような機会がないと出会えない人たちや感じられないことがあり、実際に足を運んで本当に良かったなと思います。（20 代女性）

今回大学 4 年生にして初めて参加させていただき、いわきのことや地元の方々の想いをお聞きし、大変貴重な体験をすることができました。もっと早くから参加しておけばよかったと思うくらい充実した内容でした。（20 代女性）

・現場、現地、現場の人と触れる価値を感じています。このような緩やかなつながりの潮流が被災地のみならず、日本再生のライフスタイルへつながることを期待しています。福島は負けない！（40 代男性）

・私の場合、年齢は 50 を過ぎており、若者と接する事が少なくなっています。今回のツアーに参加させていただいて、20 代に入って間もない若い方達と接する機会を下さってありがとうございました。ツアーの間、少し若さを分けてもらいました。（50 代女性）

⑤企画担当者の声

いわき市の水産業がどうなっているのか。正直このツアーの企画に携わるまで、震災以前から含めて気にかけたことすらありませんでした。いわきツアーの企画メンバーになりたいと思ったきっかけも自分の地元である浜通りで企画したい、という軽い気持ちからのものでした。しかし徐々に企画を進めていく中で、いわき市や漁業の現状について少しずつですが分かりはじめ、ツアーを終えた今では身近な存在にまでなりました。

このようになった大きなきっかけは、それぞれの立場で各々考えを持ち、過ごされている地域リサーチに行く中で出会った現地の方々です。漁師さんの中には、自由に漁をすることができなくなり「今、仕事に対してやりがいはない」という方もいらっしゃいました。加工・販売者さんの中には津波による被災から立て直し、今なお残る風評被害に耐えながらお店を営業している方々がいらっしゃいました。このように異なった考えを抱きながら生活されている一方で共通していたこともあります。それは「伝えたい」という想いを持っているということです。メディアでは取り上げられることの少ない当事者の想いや考え、現状、こだわり、知識…。私たちがリサーチに行く中でも話が尽きない程、たくさんのことを地域の方々はお話してくださいました。このようなリサーチを繰り返す中で、いわきで頑張る方々を元気にしたい、情報を発信できる場をつくりたいと強く思ったと同時に、このことが参加者の求める「水産業の現状がどのようになっているのかを“知る”」ということに繋がるのではないかと思いました。

約 4 か月の企画期間を経て、迎えたツアー当日。当初は不安でいっぱいだったものの、参加者の皆さんの熱心に話を聞き質問を投げかける姿が本当にたくさん見受けられ、その不安からもすぐに解かれました。各プログラムの中で時には真剣に話を聞き学び、時には楽しみ笑顔を見せる参加者、そしてそれを見て喜んでいる現地の方々。その姿を見たとき、このツアーを企画・実施できて本当によかったなと思いました。

今年のいわきツアーのキャッチコピーは、「この夏“大漁”の出会いをいわきの海で」。地域・参加者含め多くの方に新たな出会いがあったことは、ツアー当日に皆さんの声で聞くことができました。しかし、今後大事になってくることはこれを継続的なものにしていくことです。今回のツアーに関わった一人ひとりが何らかのアクションに繋げていくことが、風評被害の払拭のためにも震災を風化させないようにするためにも求められることなのだと思います。私自身としては、これを機に自分でもいわきに足を運ぶようにしたり自分の知り得た情報の発信をしていったり、そして何よりまだ 1 年生なので、今後も継続的にスタ☆ふくとしていわきの水産業に関わっていければと思います。

最後になりますが、本ツアーは多くの方々のご支援を受けて実施することができました。ご協力いただいた皆様に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

いわき水産漁業ツアー2015 担当　1 年

牧内美樹

昨年 6 月に団体に加入し、私自身初の担当企画となったこの水産漁業ツアー。スタ☆ふくプロジェクトの目玉ツアーでもあるこの企画にプロジェクトマネージャーとして携わることになり、企画チームが結成された 5 月は大きなわくわく感と同時に不安を感じていたことを思い出します。震災から 4 年が経ち、4 回目を迎えるいわきでのツアーでどのようなプログラムを組み込むのか、地域や参加者にもたらせるものは何か、最初の 1 か月くらいは思うように話し合いも進まず、このままでは企画がどのようになってしまうのだろうかという先行きの懸念を抱いていました。

そのような中で地域リサーチを重ね、私自身初となる漁師をはじめとするいわきの漁業関係者や加工・販売業者の方々との出会いがありました。現地へ直接足を運んでお話を伺うと、漁師が話す風評被害の深刻さや、日々揺れ動くいわきの漁業の未来に対する不安の声、さらには加工・販売業者の、困難も多い状況の中でのひたむきな姿やいわきへの想いに触れ、彼らの自らの仕事に対する熱い情熱とプライドを感じました。そしてリサーチを通して私たちが感じたことを参加者に伝えること、地域の生の声を届けること、そこに加えて震災から 4 年が経った今しか経験することができない原体験を通していわきに関心を持っていただくきっかけを作ることを目指して企画を進めてきました。

そして過去最多となる 40 名のお申し込みをいただき、無事に迎えたツアー当日。参加者が真剣な眼差しで話を聞いている様子や、楽しそうに参加者や地元漁師と一緒に交流している様子がとても印象的で、何よりまとめと振り返りの時間で 2 日間での“気づき”を自らの言葉で話してくれている様子を見たときは、今まで長い時間をかけてやってきて本当に良かったと思える瞬間でした。ツアーのプログラム 1 つ 1 つを振り返ってみると至る所に反省点が見受けられますが、企画段階から考え抜いてきた私たちが伝えたかったことを参加者の方々が感じ取ってくれていたことは大きな喜びでもありました。

いわきの抱える課題は大きく複雑で、簡単に解決できるものではありません。しかしいわきの漁業に対して全く知識や関心がなかった人たちがスタ☆ふくのツアーを通していわきの漁業の現状を知り、いわきを好きになり、いわきのために何か行動を起こす。そのような人が少しでも増えてくれることによって、このツアーの価値や私たちのいわきでの関係性を生かした継続的な取り組みが大きな意味のあるものになっていくのではないかと感じました。このツアー終了後、スタ☆ふくと地域と参加者の垣根を越えた、ツアーという形以外でもっといわきに関わることができるのではないかと考えるようになりました。「来年もいわきに来てね」や「またいわきツアーに参加したい」という声が多く聞かれたことも嬉しい限りです。福島にいる私たちだからこそできることを考え、今後の取り組みについても模索しながら、これからもいわきに想いを寄せ続けていきたいと思います。

最後になりますが、企画・広報の段階から本当に多くの方々のご協力のおかげで本ツアーを催行することができ、私たちが活動できることの喜びを感じることができました。

各関係者の皆さまやツアーにご参加くださった皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げます。

いわき水産漁業ツアー2015 担当　3 年
プロジェクトマネージャー　田辺将大

⑥今回のツアーの価値・評価

－2015 年 8 月 27 日　ツアー反省会より－

■本ツアーによって成し遂げられたもの、もたらされたもの

（1）地域にとって

・普段は伝えることのできない自らの想いを直接発信する場
・ツアー参加者の声や交流を経てのモチベーション喚起
・参加者の風評払拭
・消費量拡大

（2）参加者にとって

・メディアを通してでは分からないいわきの漁業の現状や漁師の想いを五感を通して知ることができた。
・ツアーを通しての“気づき”を自分の言葉で述べることができた。
・全国からの参加者や地域の方々との繋がりが生まれた。

（3）スタ☆ふくプロジェクトにとって

・いわきでの 4 回目のツアー開催となり、関係者との輪を広げることができた。
・継続的に関わることによって漁師のこれまでとの変化を感じことができた。
・新規のツアー参加者が多く、団体の知名度のアップにつながった。

■今後のいわきとの関わり方について

・ツアー後も地域に足を運び、本ツアーの感想やその後の変化、改善点や要望等を聞き取り、地域からのフィードバックを受け取る。
・この 4 年間の関係性を活かし、ツアー以外での地域活性化、風評被害払拭へつながる手段の模索・提案。

6. 広報・メディア掲載について

＜宣伝方法・経緯＞

7 月 2 日	募集開始
7 月 31 日	ツアー催行決定

・スタ☆ふく HP（http://sutahuku.jimdo.com/）
・Facebook ページ
…イベントページ作成、リレー投稿、参加希望者へコンタクト
・twitter アカウント（@Study_Fukushima）
　　…準備の進捗状況やツアー告知などをこまめに発信

・テレビ局、ラジオ局、新聞社への取材依頼
・告知協力のお願い
　－福島大学教授、ゼミ
　－各大学のボランティアサークル、学生団体、
　－ボランティア、観光、水産漁業に関連する団体
・福島大学第 79 回定例記者会見（7 月 1 日）
http://www.fukushima-u.ac.jp/press/H27/detail79.html
・スタッフの知人を通した告知
・東京出張

＜メディア掲載履歴＞
▽ラジオ
・7 月 27 日　FM ポコ(FM76.2)
「みんなのラジオ～FUKUSHIMA TOWN VOICE～」生放送
・8 月 1 日　ラジオ福島
「ふくしまの絆ステーション」 収録

▽テレビ
・7 月 19 日　NHK
「明日へ―支えあおう―復興サポート「放射能汚染から漁業再生～ふくしまいわき市２」」
・9 月 4 日　KFB 福島放送
「食メキふくしま」

▽新聞

・7 月 9 日　東京新聞もぎたて直送便（有料広告）

・7 月 23 日　福島民報

http://www.minpo.jp/pub/topics/odekake/2015/07/post_4914.html

・7 月 20 日　毎日新聞

http://mainichi.jp/edu/news/20150720ddlk07040046000c.html

・8 月 23 日　福島民報

・9 月 10 日　産経新聞

http://www.sankei.com/life/news/150910/lif1509100008-n2.html

▽ウェブ

福島 TRIP

「漁師さんに学ぶ！水産漁業が体験できるスタディーツアーに参加してきた」

https://www.fukushimatrip.com/2777

7. ご協力いただいたみなさま

＜企画＞
ツアーコーディネーター：金田奈都子さま
いわき市漁業協同組合 ／ 福仙和風レストラン ／ 福島県水産試験場　藤田恒雄さま ／ 沼ノ内港　臼井さん、四倉港 佐藤さん、久ノ浜港 阿野田さんをはじめとしたいわき地区船曳網漁業連絡協議会のみなさま ／ いわき湯本温泉古滝屋　里見喜生さま ／ 山一中田商店　中田昌俊さま　／（有）ニイダヤ水産　賀澤信さま ／ グランパークホテルエクセルいわき

＜企画実施＞
福島交通観光株式会社

2013 年 6 月には、福島県復興のために地元若者が県内外の多くの若者を巻き込んでツアーを実施している点が評価され、「第 1 回若者旅行を応援する観光庁官賞・東北ブロック賞」を受賞しました。

本プロジェクトは、住友商事　東日本再生ユースチャレンジ・プログラム―活動・研究助成―2015 年度の助成により行われました。

―いわき地区船曳網漁業連絡協議会の皆さんと共に―

8. 総括

2012 年 4 月にプロジェクトが発足したスタ☆ふくプロジェクトのメイン事業であるスタディツアーも今回で 13 回を数えるに至りました。東日本大震災、福島第一原子力発電所事故から 4 年半が経過し、福島に対する関心が徐々に低下してきていることを感じ、いかに多くの人をツアーに巻き込むかを常に考えました。その結果、過去最多の 39 名もの方々にご参加して頂き、五感を使っていわきや福島への理解を深めることが出来ました。

このようにツアーを開催することが出来たのは、地域の関係者をはじめ、毎回多くの方々のご理解とご協力を頂いているおかげです。私たちが恵まれた環境にいることに感謝しつつ、現状に満足せずに団体の、福島の更なる発展のためにチャレンジし続ける姿勢を大切にしていきたいと感じています。

私たちの目指すべき社会は「先進的地域活性化モデルとしての福島」の実現です。これは震災復興だけに留まらず、私たちの活動を通して、参加者と地域の人々の双方向の交流や主体性を喚起することで、ともに地域がより良くなる活動をおこし、福島から地域活性化としてのモデルを発信していくということです。私たちの主軸となっているスタディツアーは、徐々に見えにくくなってきている震災の爪痕をあえて掘り出して見てもらうのではなく、今の、ありのままの福島や福島に生きる人々の姿を、実際に福島に足を運ぶことにより五感で感じてもらいたい、という想いから企画実施しています。ツアーという形をとることで「被災地福島」としての側面だけでなく、地元の人との交流や体験をしながらともに時間を共有することで福島に愛着を持ったり、未来を考えるたりすることが出来ると感じています。地域と参加者、私たちスタ☆ふくの緩やかかつ強い繋がりが、微力ではありますが、福島の地域活性化の一助となると信じ、活動に取り組んできました。

「いわき水産漁業ツアー2015 あなたと漁師の絆旅」と題した今年のツアー。福島やいわきの漁業のことを知ってほしい、“自分事”として考えてほしいという想いをこのツアータイトルに込めました。私たち自身、何度もいわきに足を運び、漁師さんや水産加工業を営むいわきの人々は、将来への不安を抱えながらも現状を受け止め、前を向いている姿を目の当たりにし、少しでも力になりたいと思うようになりました。私たちは地元の方々の立場を理解して完全に自分事として捉えることは出来ないかもしれません。しかし、少しでも心を寄せ、共に福島の未来を考えていくことは出来ます。そしてそれが地域の方にとっても力に

なると信じています。そのような想いを持って迎えたツアー当日。台風の影響により、予定していたプログラムを実施することは出来ませんでしたが、地域の方々が参加者と私たちを温かく迎えてくださり、存分に交流しながらいわきの漁業の現状を学ぶことが出来ました。参加者の中には福島の海産物の安全性を確認するとともに、未だに週に一度の試験操業しかできない漁師の無念さにやりきれない想いを抱えた方もいらっしゃいました。漁師さんのみならず、水産加工を営む方々の情熱やこだわりを知り、干物や鰹節といった日常生活で何気なく口にする食材に対する見方が変わったとの声も聞くことが出来ました。

最後のワークショップの場では漁師さんから「自分たちにとってこのツアーはチャンスなんだ」との言葉を頂き、体験や交流を通して地域の方と参加者の皆さんが互いに心を通わせることの大切さ、顔が見える関係を構築していくことの意味を改めて確認し、私たちに出来ることは本当に小さなことですが、まず第一に自分たちが地域の現状やそれぞれの想いを理解し、伝えていく姿勢を大事にして活動に取り組みたいと思います。

最後になりますが、今回の企画に携わってくださった多くの方々に改めて御礼申し上げます。今後とも応援いただければ幸いです。

2015 年 10 月
代表 羽賀さやか

9. お問い合わせ先

スタ☆ふくプロジェクト

代表：羽賀さやか

住所:福島県福島市金谷川1
福島大学学生課 スタ☆ふくプロジェクト宛

Mail:suta.fuku@gmail.com
HP: http://sutahuku.jimdo.com/
ブログ: http://ameblo.jp/sutafuku/

編集

「スタ☆ふく」水産漁業ツアー2015 担当
福島大学　共生システム理工学類 3 年　田辺将大
福島大学　行政政策学類 3 年　羽賀さやか（団体代表）
福島大学　経済経営学類 1 年　牧内美樹

福島大学　行政政策学類 3 年　三浦菜生
福島大学　経済経営学類 3 年　黒澤和也